

〈調査報告〉

中国の博物館・美術館訪問記(中)

杉本 憲司

浙江省の杭州湾南岸には、日本文化と関係の多い地域が存在し、また興味深い博物館などがいくつかある。ここでそれらについて少し紹介してみよう。

杭州市西北方の余杭地区にある良渚美麗公園(良渚鎮の西)には、この地域にある多くのすぐれた玉器をつくりあげた新石器時代の良渚文化の中心となる良渚遺跡を紹介する大遺跡博物館がある。国家の援助で新設されたもので、その立派さに感嘆する(イギリス人建築家デヴィッド・チッパーフィールドの設計)。1万平方mの館内にはバーチャル考古学室などのマルチメディアシステムが多く使用され、4D映画がみられる部屋もあり、常設展示室・特設展示室に展示されている遺物と共に、文化全体が良くわかるようになっている。

さて、この博物館をみてからは遺跡の中心地の見学にうつる。反山地区の莫角山(東西約670m、南北約450m、高さ5～8m)の一部を道路工事で切断したところ、これは人工築成のものであることがわかり、更にその上面にいくつかの遺構が発見されて、注目するところになっていた。最近、ここを国家重点保護遺跡区にするための、この台地の住居を移転して事前調査を行ったところ、遺跡西部(瓶窑鎮葡萄畝西側)で、南北方向に溝(幅約45m、深さ1m強)と人工版築(高さ4m)が発見された後、ボーリング調査とトレンチ調査をしたところ、四周をめぐる城壁が確認された。城壁の底部には石塊(附近の山より取ってきた岩)を一面(幅40～60m)に敷きつめた上に、比較的純粋な黄色粘土(附近の山より取土)を底部で幅40～60m、残高約4mに版築されていた。全体の形は隔丸方形で南北長1800～1900m、東西幅1500～1700mの大きな城壁があることがわかった。以前にわかっていた大版築丘陵と、その上にある宮殿についてのバーチャル復元があ

る。この城の内外には、多数の玉器を副葬した、瑤山・反山・匯観山などの墳丘墓が分布している。

杭州湾から少し南にはなれた道路を東に、寧波にいたる間にもいくつかの見学地がある。ここでは、それらを紹介してみる。

一つは1970年代の初めに発見され、日本の稲作文化・弥生文化との関係から注目された河姆渡遺跡がある。現在は調査は終了し、2008～09年に改造された「河姆渡遺址博物館」があり、河姆渡文化の概要を知ることができる。

館内にはいくつかのテーマをたてて、それに沿った展示をしている。“滄海桑田”では河姆渡文化時代の自然環境を、温暖・湿潤の気候で育まれた、植物・動物・魚類が示されている。“日出而作”では、この文化の特色である稲作農耕、農具、家畜(豚・犬・水牛)、漁撈、採集の生活が展示される。“湖畔人家”では、高床式住居、柄・柄穴をもつ建材、建築方法、舟の櫂、土器などが展示される。“心霊之声”では、骨器(骨・象牙)、木器、土器などにあらわされる文様・造形による、河姆渡文化にみられる精神文化を展示する。“河姆渡猜想”では、今までの研究成果と残された問題について展示して、展示全体のしめくくりをやっている。この河姆渡文化には、非常に注目すべきは、農業収穫を祈る太陽神崇拜を示す、中国ではもっとも古い、鳥と太陽、月など天体物との組合せた文様があり、後の農耕にともなう宗教的な原初信仰を知ることができる。

河姆渡文化に属する遺跡が、河姆渡遺跡の周辺に約40ヶ所以上存在している。その中でもっとも大きい「田螺山遺跡」が、河姆渡遺跡の東北約7 kmにある(余姚市三七市镇)。これは2004年から今日まで発掘調査が続けられている遺跡博物館で、大きな体育館のような屋根をもっていて、この中での調査と、今では博物館周辺でも調査が続行中で、いついっても新知識が得られるところである。特に木製品遺物の残存が多く、独木橋、櫂など河湖畔の生活の様子がよくわかる。

慈溪市橋頭鎮にある人工ダムの上林湖湖畔に約500ヶ所の漢代より宋代に至る窑址が発見されている。特に唐代の秘色青磁(西安郊外の法門寺地宮から出土して注目された)を焼いた窯跡の「荷花芯窯址」がある。湖岸

では多くの磁器片が残されている。

寧波市の東海にある舟山列島には、仏教関係の寺院が多くあり、日本の仏教と関係が深い、普陀山がある。寧波からは、橋で島々がつながり、最後だけ舟で普陀山に渡る。ここは、中国四大仏教名山の一つで、伝えでは五代時代(907～960年)に「不肯去観音院」が建立されて以来、歴代、寺院がつくられ、その中でも普済禪寺、法雨禪寺、慧済禪寺は中国南方にある清初建設の禪宗寺院の典型とされている。

普陀山は四面海にかこまれ「海天仏国」といわれる航海安全を祈願する信仰の島であったので、日本から寧波を目指した人は、必ずここで一度は祈りをささげている。日本の僧侶である恵萼が、平安時代初期に五台山から帰るとき、舟がこの島の側で動かなくなったので、五台山から持ってきた観音像をこの島に祀り、無事帰ることができたという。この観音像は「不肯去観音」といわれている。

日本の曹洞宗の祖である道元(1200～53年)がここを訪れているし、また日本に渡り日本禪宗に大いに寄与した、普陀山住持の一山一寧も有名である。

臨済宗法灯派の祖である無本覚心(1209～98年)が、普陀山から阿育王寺にいつているが、帰国の時に嵐にあい、持っていた観音の小画像に祈ったところ、帆先に観音の月輪があらわれて、無事に博多に帰って来たともいわれている。このような日本仏教と関係の多い普陀山の参拝見学は、日本人の歴史との関係で多くの成果を得るところである。寧波からは一日行程でいけるので、おすすめの地である。

寧波は杭州湾出口の南岸にある大都市であり、市内人口で200万人、大寧波市内では600万人を数える。海岸から少しはなれているが、古代以来、港湾都市としてさかえ、東アジアのハブ港として、とくに中世には日中間においてはもっとも重要な港であった。舟は海から甬江を西にはいり、寧波の町の港につくことになっている。

この寧波の東北部では余姚江が甬江とつながり、省都の杭州につながっている。杭州は南宋時代の都であり、ここから中国大陸の各地に交通が通じていた。地名は唐代には明州、南宋では慶元府、元代では慶元路、明代

以後は寧波と名前がたびたびかわっていたが、日本の遣唐使、日宋貿易、日明貿易の船が発着したところで、日本と中国の間ではもっとも重要な港であった。中国の文化・唐物^{からもの}が海外に出ていく地であった。

仏教関係では、天台宗の最澄が遣唐使の留学僧として入唐した貞元20(804)年、ここ明州に着き、通行許可証をもらい、天台山巡礼を行っている。この時に空海も唐にはいり、長安で真言密教をおさめ、元和元(806)年にここ寧波から帰国の途についている。

北宋以後は寧波に海上貿易管理の役所である市舶司がおかれたので、日本と寧波の間で多くの船が行来し、日本僧も多くここに渡り仏教を修めて帰った。多くの仏教関係の文献(経典、仏像、仏画など)の外、陶磁器、漆器や茶・味噌など多くのものが、ここから伝えられた。

室町時代の禅僧で画家として有名な雪舟(1420～1506年)が、天與清啓を正使とした遣明使節の一行に加わって、応仁元(1467)年に入明し、寧波南郊の天童山に参禅している。「四明天童第一座」の肩書きを入れた雪舟画がみられるのがそのしるしである。この後、雪舟は北京に至り、礼部院中堂に壁画を描いているが、この旅の途中をスケッチ(「山水長巻」)で描いている。今日は真本は伝わらず、模写本の「唐山勝景画稿」が、ボストン美術館本と東北大学附属図書館・狩野文庫にあるが、この第五段に寧波を描いていて、ここに寧波城の東門附近の部分があり(「寧波府東門也」)、堀のところにある舟橋のところに「舟橋」の書き入れがある。これは明州城の地図にみえるものと全く同じで、当時の実態を知ることができる。

寧波周辺には仏教関係の文化遺産が多く、且つ日本仏教との関係がある寺院がある。市南方の太白山中には、日本禅宗のふるさとである天童寺がある。これは晋の永康年間(300～301年)に義興が建立したもので、南宋の建炎3～紹興27(1129～1157)年に住持であった宏智正覺の時に寺勢が拡大して中国禅宗五山の第3位になった。日本の明庵栄西(1144～1215年)が、ここで禅を学んでいる。栄西は仁安3(1168)年に重源と共に入宋、文治3(1187)年に再び入宋して、天龍寺の千仏閣の修復を請け負っている。この時に日本から巨木材を送っている。後、孫弟子の道元も天童寺の如浄から教えを受けて曹洞禅を日本に伝えている。明代になって朝貢貿易が盛んに

行われた時にも日本との関係が続き、雪舟が先述の如く、ここで参禅して「四明天童第一座」の肩書きを称している。

寧波の南方にある広大な山地天台山には、東晋時代(317～420年)に智顗が入山して国清寺をつくったのにはじまり仏教聖地になる。最澄(767～822年)が天台教学を志し、入唐して天台山で学び、その後、円珍(814～91年)、成尋(1011～81年)、明庵栄西など天台僧を中心に多くの日本人僧がここに入山している。

また寧波西南にある天台山の支脈である四明山があるが、ここも天台仏教の拠点である。

寧波市東部には、インドのアショーカ王(阿育王)の建立した仏舎利塔が地中から沸きでたという伝承をもつ阿育王寺がある。ここは中国仏舎利信仰の聖地になっている。仏舎利塔は歴代の皇帝の崇拜をうけ、五代十国時代の寧波地方を統治した呉越国の最後の王銭弘俶(948～78年在位)は八万四千の仏舎利小塔をつくり、国内各地に広げ、現在は金属製小塔は中国各地だけでなく、日本にもいくつか伝えられて発見されている。また鑑真が5度の失敗の後、6度目に日本に渡ってきたが、第2回目の渡航失敗で寧波にたどりついて助けられた時、阿育王寺に居住することがゆるされている。

寧波市街地から東南15kmにある東銭湖(東西6.5km、南北8.5km、周囲45km)は、水質も良く景観も優れ、宋代以降多くの文人をひきつけるところであった。南宋の宰相を三代にわたって輩出した名族史氏一族の拠点で、湖周辺に墓地をつくり、その参道に文官・武官、動物などの石像を並べた。今日では、その多くが、湖畔につくられている「南宋石刻博物館」に移されて展示されている。これらの石像の石材は梅園石といわれるやや赤紫色がかった石材で、我が国の奈良東大寺南大門の石獅子の石材に似ている。

『東大寺造立供養記』によれば、俊乗房重源が中国から石材を求め、宋人の石工にこの石獅子をつくらせたものとある。

又、南宋宰相史浩は月波寺をここに創建し、ここで日本の施餓鬼会や盂蘭盆会と同様の先祖供養をする水陸会を行い、多くの仏、菩薩、羅漢をはじめ護法神、星宿神、十王などの神々の画像を描いたものを壁にかけた

“水陸絵”の多くが日本に伝来している。

寧波市街区にも多くの文化施設がある。西月湖辺にある「天一閣」は「南国書城」といわれるもので、明の嘉靖40(1561)年に明の兵部右侍郎であった范欽の蔵書を入れるものとしてはじまり、欽の曾孫范光が清の康熙4(1665)年に、その樓のまわりに築山などをつくって庭園としてすぐれたものをつくった。閣内の蔵書は1万3000点以上もあり、その中には宋版・明版などの内外の孤本が多くあり、学会で大いに注目されている。樓内のいくつかの展示室には、その蔵書・戸籍・官人の職歴などの帳簿などが展示されている。また館内には、この寧波が麻雀発祥の地とされているので、麻雀に関する展示室もある。その外、庭園内には附近から集められた碑刻も多くみられる。嘗ては図書に興味を持つごくわずかの人が見学するところであったが、最近は観光ルートに入れられて、多くのツアーの人が庭園などをめぐっている。

全国重点文物保護單位に指定されている「慶安會館」は、咸豊3(1853)年に建てられた「甬東天后宮」として、媽祖神がまつられていたが、同時に「行業集會場」として商人の集會場で、江南に唯一の現存建築である。また、この場所に「浙東海事民俗博物館」が併設されていて、多くの船の模型が陳列されている。船舶に興味を持つ人にとっては見逃すことのできない場所である。

「寧波博物館」が新設されている。1階は特別展示室で、企画展を行っている。私が訪れた時は、中国国家博物館蔵品の「国家宝蔵」展が行われていた。2階は寧波史の展示室があり、先史時代から明・清時代にまでの文物が展示されているが、特に日本との交流に関しての文物が多く展示されていて、日本人の參觀者には、寧波と日本との深い関係を文物を通じて知ることができる。この外、印章展室、竹製品室、扇室などがある。

寧波から帰路によりたいところには、地域史の博物館である「余姚博物館」がある。ついで、春秋・戦国時代の越の都があった紹興も忘れることのできない町である。また、ここは飲助にとっては有名な紹興酒の生産地である。市内には魯迅の生誕地として関係の場所も多くある。附近には越王台、大禹陵の史跡もある。郊外には書聖の東晋時代の人「王羲之」の散

文である「蘭亭序」を書いたとされた曲水の宴がひらかれた場所が公園となっていて、ここも多くの観光客でにぎわっている。

また郊外の山地に、「越王陵」(越王勾践の父允常の墓とされている)の墓坑が見学できる。この墓は中原の墓とはことなり、山頂の岩をけずり墓坑をつくっている。墓は東向きで、墓道、甲字形竪穴土坑墓(長さ46m、幅14m、深さ12.4m)で、この中に漆ぬり大木で三角形に組合せた前・中・後室の墓室がつくられ、中にやはり漆ぬりの丸木舟形木棺(長さ6.1m、幅1.1m、高さ0.4m)が入れられていた。墓は盗掘にあっていたので、遺物がわずかに残されていた(玉器、玉剣、石器、漆器、青銅器など)。今日、墓坑が見学できる遺跡博物館として立派にできている。

杭州市内には、新しく生まれかわった「浙江省博物館」があり、省内のすぐれた文物(良渚文化関係の玉器など、越文化関係のものなどが注目される)が一堂に会している。また杭州市内の宋代関係の文物をみせてくれる、「杭州歴史博物館」も見逃すわけにいかない。前述の如く、杭州は南宋時代の都であったが、その時期の遺構が市内の地下に残っている。この内の一部が土木工事の現場に、地下遺跡として、都の中央道路の御街遺跡が見られるようになっている。

杭州蕭山空港のあるところにも見学すべきものがある。一つは「跨湖橋遺址博物館」である。これは且つて発掘作業中に見学したとき、ここの出土遺物のもっとも注目される、紀元前7000年以前にさかのぼる時期の丸木船が出土した直後であったので、地元テレビ局にその感想を話したことがある。今日は、遺跡全体が大きなドームでおおわれた遺跡博物館になっている。

市内区には「蕭山博物館」がある。この地域は陶磁器生産(越州窯)の中心地であるので、陶磁器が中心である。館長も陶磁器研究の専門家である。その他、この地区の歴史名人、蒐集品(書画、金工、玉石)がみられる。更に特展室では、この地域の墓の展示が行われていたのを見学した時にあった。

又、浙江省には、明・清時代のおもかげを残す村落もいくつもあるので、これらを見学することも旅の楽しみの一つになる。私たちは、一つは寧波

の南の方にある寧海県の前童古鎮であり、もうひとつは杭州の南方にある富陽市の龍門古鎮がある。ここは孫権の子孫(38世?)が居住するという古鎮で、明・清時代の古建築が残っている。いくつかはもう保護するのが限界というものもある。玉石をひきつめた迷路のような町の中で、今はスポーツ用品の生産をなりわいとする人達が多いところである。

湖北・湖南の旅では、新石器時代から、今日にいたるいくつかの遺跡・遺物と、それと関連する博物館を見学することができる。私の最近(2014年)の旅行で見たものを中心に述べてみたい。

湖南省長沙市は、省都として湘江兩岸にまたがってあるが十数年ぶりにおとずれて、その発展ぶりに驚かされる。今回の旅行の一つは、漢代の馬王堆墓の見学がある。というのは、女性ミイラ(老人)が出土したことで有名であったが、時と共に他の発見が多くなったことで、少し忘れられるような感があるので、今回もう一度かつての興奮を思いだそうという意見で見学をした。ここは病院建築で発見されたものであるが、昔の軍病院から今は民間病院になっていて、老人の患者が多くみられる。病院入口をはいつてすぐ左横の小高い山の上に古墳があり、現在は2号墓の墓坑が発掘後のかたちで残されていて、遺跡現地博物館となっているが、出土遺物などは今は省博物館にある。残念ながら省博物館が新館建設中(2014年春現在)で、今回の旅では見る事ができなかった。

長沙市内の中心部で、日本の平和堂が、ショッピング・センターを建設した時に、地下を掘り下げる工事を行った時、ここで古井戸のあとがいくつも発見された。(嘗て[1996年]この工事中に現地を見学する機会にめぐまれ、いくつもの古井戸があったことを、今でも記憶している)。その中の一つから三国時代の木・竹の簡牘が約14万点も発見された。これは「走馬楼呉簡」と称せられている。これにより正史の『三国志』呉書以上の文字史料がみられるようになり、研究はどんどん進むことになった。この簡牘の出土を記念して、市内に「長沙市簡牘博物館」がつけられ、そこに走馬楼簡をはじめ、全国の出土簡牘の真・コピーが展覧され、説明をされていて、中国古代の歴史に出土文字資料によって、一歩でも近づくことができ

る(しかし説明文などで、新発見・新研究が若干反映されていない点があって、少し残念である)。

中国の博物館に入館するときに、日本と異なった経験をする。この「長沙市簡牘博物館」では入館に身分証明書(国が発行したもの)が必要で、外国人はパスポートを提示して入館する。

長沙市内でもう一つ見学したのが、湖南大学の「岳麓書院」である。市内から湘江をこえた西方市内には、岳麓山という小高い山の名所があり、嘗て毛沢東が仲間と会合したり、図書を愛読したという「愛晚亭」があって、今は大観光地になって多くの人々が登っている。その時に大学の中の道を通っていく。今は、余り人が多いので大型バスは、はるか遠くに止められ、シャトル・バスで大学のもとまでいき、そこから山に登るので、大学の中も一大観光地化して、学生はそれら観光客の間を校舎に移動している。「岳麓書院」は中国古代四大書院の一つで、北宋時代の開宝5(976)年にはじまる、今でいう図書館である。現在は国家から「書院博物館」として特に援助をうけて、書院全体の歴史を展示している。嘗て訪問した時は我々数名と、大学院生数名がいるようなところであったが、今は観光地の一つの見学場所になっていて、団体の観光客が多くみられる。私達は、湖南大学岳麓書院の主任である陳松長教授(中・日での学会で旧知である)にお願いをして、書院が持っている秦代の竹簡を見学することを特別にゆるされた。これは香港の骨董市場に流出していたのを購入したもので、今は「岳麓書院秦簡」といわれ、陳教授を中心に研究が行われていた。今はすでに図版・釈文が出版されはじめている。『質日』という暦譜から、秦始皇帝時代のものであることがわかっている。今回は整理ずみの簡がプラスチック・ケースにはさまれて、1箱15本ずつ整理されたもの4箱をみせてもらった。よく整理されていて竹簡の文字もよく読めるようになっている。

長沙市から、北にある洞庭湖などの湖沼地区を西側の道で常德市にむかう。この地区には長江中流域にある新石器時代の大型の環壕大遺跡が存在している。湖南省側には常德市澧県にある彭頭山遺跡と鷄叫城遺跡が有名である。この中でも彭頭山遺跡が時代がもっとも古く、紀元前7500~6100年頃にあてられる。今回は、この遺跡に交通事情でいけるかどうか不明で

あったが、先ず「常德市博物館」に行くことにした。常德市内の旧石器時代からの遺物が、よく整理されて展示され、戦国時代の楚国文化、漢代文化、それ以後の時代の文物がみられる。中でも漢代の滑石製明器が目立った。近現代史の展示では日本の長沙作戦の常德地区での様子がわかる。残虐行為が強調されて展示をしている。

この後、城頭山遺跡に行く道路が整備されていかれる事がわかり、道路工事中をうまくさけながら遺跡に行った。遺跡は直径約325mの大環壕遺跡で、水田址もみられる。環壕内に大型住居址もあり、その外に土器製作窑址、墓葬区、祭壇様遺構、南門址もみられ、今日では国の重点文物保护单位に認定され、大規模な遺跡保護をかねての工事が進行中である。ここから帰る時に、高速道路工事中をみると、そこにすでに「城頭山遺跡口」の高速出入口が予定されていることがみられる。

常德市を出発して北上、長江を渡って湖北省荆州市にはいる。この附近は下流の湖北省々都武漢市にいたる間にかけて、長江がすこし南に湾曲して流れるが、この北側はかつての雲夢沢で、長江の水が増水した時の停水沢になっていた。ここは、今は干拓されて大農地になっているが、今でも長江上流で大雨が降ったりして増水すると水がたまるところとなっている。

荆州市は湖北省中部で江漢平原の西部に位置し、春秋・戦国時代には楚国の都城「郢^{えい}」（紀南城）の地であり（後で見学する）、秦時代には南郡、漢時代には江陵といわれ、長江流域を支配する重要拠点であった。三国時代には更に重要な拠点地となり、諸葛亮の言葉に、「北は漢・沔により、利は南海に尽き、東は呉会につらなり、西は巴蜀に通ず」といわれるような地で、赤壁の戦い(208年)後、曹操が支配したが、建安24(219)年に荊州牧であった劉備の守将関羽が建造した城が、今日の荊州城のもとで、今の城壁の内部には、この時の古い城壁がかくれている。関羽以後も戦闘での争奪の対象であった。今の新しい城壁は古い三国時代の城壁をもとにして、南宋代、明代の修築を経て、清代に再建されたものである。全周11.28km、面積4.5平方kmある。今も東城門のところがほぼ完全に残っていて、門の構造がよくわかる。

荊州城の北側に、春秋・戦国時代の楚の紀南城址があるが、今回の旅で

はこの城址を後にまわして、紀南城の東側の道を北上すること約26kmにある、春秋・戦国時代の楚王陵区の見学に行く。今は「楚王車馬陣景区」という国家考古遺址公園—「熊家冢遺址博物館」が建設中である。主塚は直径70m、高さ4～5mあり、墓坑は甲字型土坑堅穴木槨墓であるが、陪葬塚があり、特に主塚西側の車馬坑(長さ131.1m)があり、中に周天子の儀礼にあうような、車馬列が埋められていた。別に小車馬坑が39個、2列に並んでいた。また横に祭礼坑が213坑ある。この外、主墓の南に4号殉葬墓があり、玉器400以上が出土している。外に武器だけを入れた殉葬墓もある。とにかくこれだけの大規模の黄泉の国をつくった楚王の大きな権力と、中原の国に対する強気の姿がみられる。誰の墓かについては楚の昭王(B.C. 515～489年)、恵王(B.C. 488～432年)、宣王(B.C. 369～340年)、威王(B.C. 339～329年)のものとする諸説がいわれている。これらの遺跡が地下博物館として、発掘した後の姿がみられることで大変すぐれたものであるので、もう一度いってみる価値がある。

ここからの帰りに楚の都城「郢」址である「紀南城」による。東に豊かな江漢平原、西にけわしい鄂西山地、南に長江、北は中原に通ずる地にあり、城のまわりは肥沃な土地で農耕に適した、水陸の交通要地である。城は東西約4000m、南北約3500mの泥土を版築した城壁で、北壁両端は隅切角のようになっている。城壁は現高で7～4m、幅は14～10mある。城門は西壁に2、南壁には水門を含めて2、特に南壁東門は突出したもので、城内に岡がある。東壁も水門を含めて2門、北壁には1つある。南壁西門の水門からはいった水路は北壁まで続き、途中で水路は東に流れ、東壁の水門に行く。この城内水路の中に宮城区と陶窯址のある手工業区がある。見学は南壁東門からはいて、丘陵上から遠望するだけである。且つて研究調査旅行の時はジープで城内をまわったことを思いだした。

荆州市内には、国家一級の博物館である「荆州博物館」がある。武漢をふくめ湖北省内の博物館の中でも首級で、博物館単独で湖北省内の遺跡を発掘することができるようになっている。このため附近の新石器時代から、春秋・戦国時代の楚の都城「郢」附近の古墓群から出土した遺物が数多く収蔵され、展示されている。且つて博物館内の研究室で石家河遺跡出土の

玉器を調査したり、収蔵庫で漆器、織物などを特に見せてもらったことを思いだす。石家河出土の玉器、土器、動物土像、春秋・戦国時代の楚文化、多くは附近の楚墓からの出土品で青銅器、漆器、衣服類の布帛、竹簡(楚墓出土の書物類など)の一級品が陳列されている。また前漢時代墓出土の男性ミイラもある。とにかく多くのすぐれた展示品に展示見学つかれがするし、観客の人達の多いのには驚いた。

旧雲夢沢、今の豊かな江漢平原の北辺の丘陵端に存在する新石器時代屈家嶺文化期の石家河城址、陶家湖城址、門板湾城址の中、一番大きな石家河遺跡(東西1100m、南北1200m)にたちよった。今は城壁と隍溝だけがみられる。城内を地元研究者に案内されて歩く。西城壁を中心に見学をした。

次に少し北東方向に車をすすめて隨州市に行く。この時に途中で天門市による。ここは唐代の文筆家で、茶にくわしく『茶經』という茶に関する本をも書いている陸羽の住んでいた町で、市内の陸羽公園には陸羽の像がおかれている。

隨州市の中央部、河から約20m高い丘陵端の小山に曾侯の墓がある。これは岩坑堅穴(墓坑東西21m、南北幅16.5m、深さ11m)内に、不規則多辺形の4室からなる木槨室がつくられている。墓道はなく、今は封土もなくなっている。木槨室のまわりに粘土・木炭をまいてある。木槨の木は梓^{あずさ}である。

墓主人(曾侯乙、42～45歳位)は二重棺に入れられ、随葬品が棺内に玉・骨角・金器300余件あった。墓室内に陪葬棺21あり、若い女性のような。副葬品は15400件あり銅礼器の中には蠟型鑄造のすぐれた工芸品のものがふくまれる。特に楽器(編鐘、編磬、鼓、瑟、琴、笙、排簫など125件)は出土品の中では注目された。その他兵器、車馬具、漆木器などが数多くあり、文字資料としては遺策の類の竹簡も出土している。出土銅器に「曾侯乙」の銘文がみえる。今日は出土品は省の博物館に収蔵されていて、現地は墓坑と中に模造品などがおかれている。この墓より西100mに擂鼓墩2号墓がある。これは時代が少し後の戦国時代中期のものである。今回は墓の大きいことが実感されたが遺物は省博物館にあるので、それを期待した。

予定では殷代遺跡「盤龍城」による予定であったが時間の都合で、武漢市に直接に行き新しく建築がえされた「湖南省博物館」に入館した。表玄関から広い前庭を通して本館に行くが、今回は予約していたので、本館の左側にある建物で、午前中に見学した曾侯墓から出土した楽器(復元品)による音楽を聞いた。これまでも、この省博物館と、東京国立博物館での「曾侯墓展」と、今回と三回聴いたが、古代の音の響きにうっとりした。博物館展示見学は時間におわれ(省上級役人の見学があった)充分に見学ができなかったのが残念であった。それでも一応早や足で、曾侯乙墓出土品、旧石器時代関係、新石器時代の屈家嶺文化、殷代の盤龍城出土の遺物を見学した。(未完)

キーワード：中国、博物館、美術館、考古学、遺跡・遺物